

海軍

ミッドウェー海戦の

「最上」と特攻機の整備

兵庫県 岡田 寛

大正九（一九二〇）年十二月十日、兵庫県多可郡加美町に生まれ、実家は農業と建築板金業をしていました。学校を十六歳で卒業し、板金技術は実家で修業するのではなく、「他の飯を食べなければ駄目だ」という父の方針で、いわゆる「年期奉公」として広島のアート町の親方の所で修業をしました。その期間は六年程で、軍隊に行くまで広島にいたわけです。この板金の技術が入隊後、航空機の修理に役立つことになったの

でした。

軍隊へは、友人達が陸軍に入営する者が多いのに、私だけは昭和十七（一九四二）年一月十日、海軍の大竹海兵团に入団し、三月十日、二等整備兵となり（技術が認められたのか）、呉海軍航空隊、最新鋭の巡洋艦「最上」に乗り組みました。

「最上」は、四月二十二日、呉軍港に入り、五月十二日、広島湾碇泊ということでした。私達新兵は、明日のことも分かりませんが「最上」乗組みということと緊張をしていました。当時、現に大東亜戦は開戦半年足らずです。ハワイ、シンガポールで、米、英の艦隊に大勝した後のことですから、我々の心の底にも「不敗」「大勝」という、期待と躍動があったと思いますが、ただただ夢中というのが本当であったかもしれ

ません。

しかし、ミッドウェー海戦は、ご承知のような大敗戦であったのです。戦況等は、我々兵隊には全々分ならず、我が「最上」艦は、僚艦「三隅」と激突、艦首を失い、爆撃を受け、戦闘不能となりました。米艦隊は日本海軍の暗号を解読していて、我が艦隊が集まった所を爆撃したということを後になって聞いたのです。

私は乗艦していましたが、「最上」艦は戦闘不能となったものの、沈まずにトラック島まで曳航されて行きました。そして、呉のドックまで帰投に成功し、私は下艦したのであります。

あの時、私の目の前の上甲板で、飛行機を整備していた戦友等が、敵の機銃掃射を受けて五、六人が戦死しました。私は、非番で甲板の下にいましたので助かりました。

戦死者の死体は、ハンモックに包んで水葬をしました。機銃掃射で死んだ者と、航行不能時、至近弾で燃料タンクに穴があき（上甲板の下が航空燃料タンク）

そのため戦死した者も共に水葬したのです。もし、上甲板を貫通し、満タンの燃料タンクに爆弾が落ちたら「最上」は轟沈したでしょうが、不幸中の幸いでありました。

初陣の私は運が良かった。私はトラックから逃げて帰って助かりました。ラバウルや、トラック群島でも多くの人が玉砕している。作戦が終了し、呉軍港まで帰着したのです。その後、サイパンも玉砕しました。

ミッドウェー戦の後、引き揚げた三カ所が、皆玉砕したのだから、私は運が良かったわけです。多くの戦友が死んでしまったのに、強運であったのでしょう。

私達は、基地隊の航空整備兵ではなく、飛行機そのものについて回るのです。艦上攻撃機の整備をするのが任務であるからです。私は「最上」の時は、八機を受け持って見えました。艦上攻撃機の搭乗者は三人で、操縦・偵察と爆弾を準備する者です。従って、機体は戦闘機より大きい。人員の他に爆弾や魚雷を積むのです。

航空巡洋艦は魚雷を発射するのですが、敵の姿が見えるまで近付いて発射する。航空機は最後の時期になると特攻―特別攻撃隊で、飛行機そのもので、敵艦に体当たりする。終戦近くになってからは、弾も不足してきて、座席から引金を引いて体ごと艦に当たる。敵艦に自爆するのです。

我々整備員は手を振って見送るが、操縦士は我々に帰れと合図をする。「自分は特攻隊だから覚悟しているから」と思っていたのでしょう。

飛行機整備の時、引金―座席から投下する装置を我々が外すのです。特攻の若い人は、そのまま敵艦に突っ込んで死ぬのを覚悟していました。

青年将校等、若いのが（大学出の若い者が）特攻に出ていきます。佐伯航空隊からも特攻が出ました。生きて帰らぬつもりでの出撃でした。敵も、高射砲や機関砲などで射ち、特攻機で落されたものも随分ありました。我々は、装置を外して、自爆できるようにするのだから、自分自身で随分悩みました。

特攻機の操縦士と話をする。我々には責任があるから、三十分程試験的に飛ばすのだが、その時、整備兵が一人乗って試験をして、航空隊に渡すのであります。

飛行士は、死んでも「名誉の戦死」の時代であります。仲間の整備兵とも話をし合ったが、彼らは「もう、二度と飛行機に乗れん」との覚悟でありました。特攻機に乗ったら、二度と帰られぬ。涙も流さず、彼らは出撃していったのです。江田島の学校を出たら将校である。しかし彼らは大学を卒業したばかりのインテリが多かったです。

我々は、若い特攻将校より古い兵隊だが、特攻は若くても将校だから上官である。将校は任務を持ち、プライドがあったから、親・兄弟とは一生の別れとなるのに、涙も流さないで死んでいった。我々整備兵は、彼らの心情を思うと胸が痛くなり、悩んだものでした。

何度もくどくど言いましたが、立場を代えて考えてみれば分かるでしょう。国の為とはいいながら覚悟を

決め、決心をして自分の体（機体と一体となって）で、敵艦を沈める。その人達は故郷に親も兄弟も、結婚を約束した女性もいたでしょう。その人達の目的、搭乗機を、途中事故なく（途中故障や敵に撃墜されぬよう）敵艦・船に体当たりをされるために整備するのが、我々航空整備兵の任務だから特攻機を送り出す我々整備兵も辛かったです。

この特攻基地の佐伯航空隊にもありませんでしたが、次の勤務、美保航隊（鳥取県）は対ソ航空隊でしたので、相当優秀な戦闘機がありました。

昭和十九年三月、私は、相模航空整備学校に練習兵として入校し、三カ月間修業し、昭和十九年六月姫路航空隊勤務、続いて美保航空隊に戻り、二等整備兵曹に任官し、一つの飛行機の責任者となりました。

美保航からも特攻機は出しましたが、飛行機も戦闘に従事したら消耗品のようなものです。終戦に近づくに従って、飛行機も充分補充ができなくなって来たようでした。

整備隊には、八十人程おりましたが、それが数班に分かれ、下士官何人、兵何人となり、二等整備兵曹となった私も、一機の飛行機の責任者となったのであります。飛行機を責任をもって預かるということは、搭乗者の命を預かるのです。人の命と、高価な・貴重な飛行機をあずかるのだから、大変というか、責任が重いことでありました。

十二月十五日、終戦の時は連合軍は内地・上陸・占領に際し、一番気にしていたのは特攻航空隊でありました。従って、連合軍は内地特攻隊を解散、隊員を帰郷させるよう我が国に対し要求というより、占領軍の絶对的な命令を出したといえます。

我が航空隊は幹部将校も、戦闘部隊の将校や、下士官・兵も、皆バラバラの気持ちもありました。早く帰還させねばならないし、しかし、残務整理もあるし、であります。

飛行機や兵器は占領軍が押さえてしまいました。私は帰郷後、戻るよう呼び出され、十日程、残務整理を

しました。帰った後のことは分かりませんが、連合軍も「零戦」などが欲しかったのでしょう。

私が家に帰ったのは九月二十日でしたから、終戦後、一カ月以上経ってからでした。家の方では「よう帰って来た」と思ったことでしょう。同じ町では戦死した人もいるのですから、喜んだのは当然。お陰でも、親譲りの家業、板金工業も農業もやっています。仕事は、子供が怪我をしたので、甥が後を継いでいます。

戦後五十何年となりますが、今でも、ミッドウェー戦以後の戦いで、生きて還れたことの幸せを思うと同時に、戦死した戦友や、若くして、自らの命を犠牲にして、国の為、家郷土の為、家族の為に、戦死していった特別攻撃隊の人のことは忘れることはできませんのです。

【解説】

ミッドウェーの最上特攻整備

巡洋艦「最上」は、少年時代愛読していた『少年俱

楽部』に掲載された、あこがれの新鋭軍艦に乗り組んだ聴取者は、恐らく誇らしい思いでいたことであろう。

昭和十七年五月二十七日、ミッドウェー作戦に向かう機動部隊が、基地「柱島」を出撃したが、日本艦隊の編成は次であった。

機動部隊（南雲忠一中将）

第一 航空戦隊（赤城、加賀）第二 航戦（飛龍、蒼

龍）第三 戦隊（霧島、榛名）第八（利根、筑摩）

第十（長良、10 駆逐隊：秋雲、夕雲、巻雲、風雲、

17 駆逐隊：谷風、浦風、浜風、磯風）

4 駆逐隊（秋風、舞風、野分、嵐）、油送船八隻。

攻略部隊（近藤信竹中将）

第4 戦隊（愛宕、鳥海）、5 戦隊（羽黒、妙高）、

3 戦隊（金剛、比叡）、7 戦隊（最上、三隈、鈴谷、

熊野）、2 水雷戦隊（神通）、15 駆逐隊（黒潮、早

潮）、16 駆逐隊（初風、雪風、天津風、時津風）、

18 駆逐隊（霞、霰、陽炎、不知火）、4 水戦（由良、

9 駆逐隊：朝雲、夏雲、峯雲、

2 駆逐隊（村雨、夕立、春雨、五月雨）、空母瑞鳳、

11 航戦（水上機母艦千歳、特設水上機母艦神川丸）、

朝潮、荒潮、三日月、哨戒艇四隻、特設掃海艇四

隻、特務艦明石、佐多、鶴見、輸送船一八隻、油

槽船二隻、特別陸戦隊、陸軍一支隊、11、12 設営

隊、

4 測量隊。

主力部隊（山本五十六大將）

第1戦隊（大和、陸奥、長門）

第2戦隊（伊勢、日向、山城、扶桑）

第9戦隊（北上、大井）

3 水戦（川内、11 駆逐隊：吹雪、白雪、初雪、叢

雲、19 駆逐隊：磯波、浦波、敷波、綾波、

24 駆逐隊：海風、江風、27 駆逐隊：夕暮、白露、

時雨、20 駆逐隊：天霧、朝霧、夕霧、白雲）

空母鳳翔、水上機母艦千代田、日進、駆逐艦：山

風、夕風、有明、特務鳴戸、油槽船三隻。

先遣部隊（潜水艦部隊 小松輝久中將）

3 潜戦（11 潜水隊伊175、伊174、12 潜水隊伊168、伊

169、伊171）

5 潜戦（19 潜水隊伊156、伊157、伊158、伊159、30 潜水

隊伊162、伊164、伊165、伊166、13 潜水隊伊21、伊

22、伊23）

米艦隊の参加兵力

第17機動部隊（フレッチャー少將）

空母ヨークタウン、重巡2隻、駆逐艦6隻

第16機動部隊（スプルアンズ少將）

空母エンタープライズ、ホーネット、重巡6隻、

軽巡 1隻、駆逐艦 11隻、給油艦 2隻、

潜水艦 20隻

日本軍の目的は、ミッドウェー島とアリューシャン

攻略であったため、動員された艦船は三五〇隻、飛行

機一、〇〇〇機、将兵一〇万人を越えるという、日本

海軍史上空前絶後の大出撃であった。

アリュエーション作戦は、六月七日、キスカ、アッツ島に上陸成功した。

しかし、ミッドウェーでは、機動部隊が攻撃したが、「第二次攻撃の要あり」との報告により、敵機動部隊の来襲に備えて、各空母上では再度兵装を転換中、米空母機の急降下爆撃機に奇襲をうけて、赤城、加賀、蒼龍も、空母ヨークタウンに損傷をあたえたが、被弾により火災を起し、日本海軍の主力四隻を失った。

「最上」は、ミッドウェー西方で僚艦三隈と衝突、艦首を損傷し、三隈は翌六月七日に敵艦載機の攻撃を受け沈没した。

軍艦「最上」の艦歴

最上は二代目であるが、

昭和六年十月二十七日 呉工廠で起工

九年三月十七日 進水

十年七月二十八日 竣工、二等巡洋艦に類別

十年七月十三日 性能改善工事

十四年二月～十五年四月十二日

呉工廠で主砲換装実施

十六年、支那事変。対仏印威力顕示作戦、南部仏印進駐作戦に参加。

十六年～十九年、第二次大戦。マレー進攻作戦（昭和一六）、東印度諸島攻略作戦、ビルマ作戦、パタビア沖海戦、ベンガル湾作戦、ミッドウェー作戦（昭和一七）中部太平洋輸送作戦、マリアナ沖海戦、比島沖海戦（昭和一九）等に参加。

十七年六月五日～七日、ミッドウェー作戦中、三隈と衝突、さらに米空母機の爆撃を受け大破。

十七年十二月二十四日～十八年四月三十日、損傷復旧期間を利用し佐世保工廠で航空巡洋艦に改造。

十八年十一月五日、ラバウルで米空母機の爆撃を受け損傷。

十八年十二月二十二日～十九年二月十七日、呉工廠で修理。

十九年十月二十五日、比島沖海戦時、スリガオ海峡で米水上部隊と交戦中、那智（一等巡洋艦）と衝

突、さらに米空母機の爆撃により航行不能となり

ミンダナオ海カミングイン島付近で雷撃処分。

十九年十二月二十日 除籍

佐世保鎮守府

第五特別陸戦隊

ニューギニア戦記

高知県 岡田浩揮

私は大正十（一九二一）年八月十三日、高知県吾川郡吾北村小川（旧小川村）で生まれたが、今の若い人達のような幸福な時代からみれば、想像のつかぬような苦しい日々であった。当時の軍隊は、今の自衛隊のような、何年もほとんど自分の意志が尊重される時代とは違い、国民皆兵の時代で、満二十歳になれば徴兵検査を受け、軍隊に入ることが義務であった。

しかし、私どもは、生まれ落ちると同時にそのような状態に慣らされる教育を受けていたので、当時とし

ては苦しいとは考えていなかった。むしろ、日本国のためということ、自分から進んで、志願して軍隊に入った人々もたくさんいた。

我々海軍陸戦隊員は、昭和十八（一九四三）年五月末、ニューブリテン島ラバウルから前進命令を受け出港して一週間、「イ号第三八潜水艦」の陸戦隊員室にいた。艦は上空の敵偵察機に航跡を発見されたため、潜望鏡で敵重に監視を続けながら潜航して進むので、上下左右から水圧を受け、微動だにしないが、船内はまさに蒸し風呂同然である。僅かに太陽灯と呼ばれる白色光の下で、乗務員は皆禰一本で狭い艦内でそれぞれの部署を守っている。

便乗の我々陸戦隊員は、眠る以外は仕事がない。額や首筋から、玉のような汗を流しながら、うなされる毎日が続いていた。

突然「総員起こし！ 陸戦隊員は直ちに上陸の準備せよ！」伝声管からけたたましい起床の音が流れる。「いよいよ来た！ 我々の決戦場ニューギニアに！」。

心の底からこみ上げてくる勇氣と、激しい緊張の中で